

F/T09

フェスティバル/トーキョー

PRESS RELEASE

『金柑少年』

演出・振付・デザイン:天児牛大(山海塾)

3月7日(土)~8日(日)

於:東京芸術劇場 中ホール



© Sankai Juku

千数百匹のマグロの尻尾が壁一面に打ちつけられた舞台。

鮮明に、そして強烈に舞台上で展開される

「生と死の起源を巡る少年の夢」—。

1978年に初演され、2005年のリ・クリエーションを経た、
山海塾の記念碑的作品が、3年ぶりに東京で再演！

お問合せ:フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局

〒170-0001 東京都豊島区西巣鴨 4-9-1 NPO 法人アートネットワーク・ジャパン内 TEL 03-5961-5202/FAX 03-5961-5207

制作担当:植松 y-uematsu@anj.or.jp F/T 広報担当:及位(のぞき)、ハッセル toiawase@anj.or.jp

／ 作品について

『金柑少年』は、1978年6月に東京の日本消防会館ホールで初演され、山海塾は本作を信じ、踊る場所を求め1980年にフランスへ旅立った。そして同年5月、フランスのナンシー国際演劇祭で上演されるや、瞬く間に評判を呼び、フランス国内だけでなく、欧州・南米の主要フェスティバルから招聘を受け、ワールドツアーを開始。以来、1993年のパリ市立劇場での最終公演まで、15年にわたり、世界21カ国113都市で上演を重ねた、山海塾の現在につながる記念碑的な作品である。

本作は1993年のパリ公演を最後に上演が封印されていたが、その後も世界各国から再演を望む声が多く寄せられてきた。天児は本作を28歳で創作・発表し、15年間、その要ともいえるソロを担ってきたが、再演の要望に応えるにあたり、自身は演出・振付に徹し、4つの天児ソロパートを若手舞踏手たちにそれぞれ委ねるという形で、山海塾の創立30周年を迎えた2005年にリ・クリエーション(再創作)した。

「天児ソロを若手が踊る」という、山海塾にとってエポックともいえるこの初の試みは、フランスで話題となり、2005年12月、パリ市立劇場での新作『とき』のプレミエに引き続いて同作を上演。新作同様、連日大反響となる。また、翌年の2006年には14年ぶりに東京の世田谷パブリックシアターにて上演し、好評を得た。

作品の振付・構成は原型をとどめたまま。初演からリ・クリエーションまで30年という時を経て、若手舞踏手たちが受け継いだ山海塾初期の作品である。

／ 公演評(2006年)

◆ ものの質感に対する嗜好や、豪華なエレガンスを感じさせる天児の美意識はすでに感じられる。年月を経て、客観的に振り伝えられたものの、この作品は少年期の感性を痛烈な情景として蘇らせた。—中略—これまでの作品群は舞踏の系譜からも離れた、天児が自ら展開し築き上げた世界だ。しかしその原点は『金柑少年』だ。時代を経て、さらなる読み直しがされるだろう。(読売新聞)

◆ 舞踏の世界では、レパートリーとして繰り返し上演される作品が比較的少ない。山海塾は例外である。それは個々の作品の完成度が高いというだけでなく、日本趣味とか東洋趣味といった次元をはるかに超えて、普遍的な表現を獲得しえたからであろう。(日本経済新聞)

／ 公演評(1980年～1993年)

◆ 性をはるかに通りこす強烈なエロティシズム、打楽器の轟き、西洋音楽のけげげしさ、そして静寂、高尚な儀式舞踏に、会話のない物語が混ざり合う——開いた口からほとぼしる静かな叫び声の重み、異様な旅、息も詰まるような時間——。山海塾は我々の知覚、価値観を根本から覆した。(ル・モンド)

◆ 山海塾はグロテスクで、変形した肉体にとらわれながらも、「異常・変態」そのものが、事物の自然な秩序の一部であることを提示することによって、それらを美的なものにしてしまう。(NYタイムズ)

◆ 特定なものにとどまりながら普遍的であろうとし、散在する過去から共有された記憶を喚起する——この作品の素晴らしさは、パラドクスのもっとも複雑に絡まりあう部分を紐解く無限性にある。山海塾が類希なのは、一点の濁りもないメタファーに到達している点だ。彼らは他のいかなるものにも類似しない。(タイム)

◆ 動きそのものが、許しを獲得した彫刻のようだ。山海塾の舞台は、一種、幻想的な悪夢であり、寓意的な旅であり、相反するイメージのひずみによる衝撃でできている。(サンデー・スタンダード)

/ シーンタイトル、作品テキスト

金柑少年

- | | |
|-----------------------------|----------------|
| I. 金柑少年 | 記憶の裏側へ |
| II. 闇の手 | 微細な世界・犠儀 |
| III. 孔雀 | この自然の虚飾 |
| IV. 秘楽 | 伝承不能な調べ…都市の中の点 |
| V. 豆太郎 | キシム笑い |
| VI. 処理場Ⅱ | 限りなく遠のいてゆく捕獲の地 |
| VII. 金属性の飛鳥 ^{ヒチョウ} | 海浜の涯て |

海と陸との際にたたずんでいた。

目前に広がる水平線。

その下には無数の魚がうごめいている。

水面を下からあおぎ見ている。

無数の心臓が音を立てている。

音は一つに重なり巨大な響きを持ったり、分散したりをくり返している。

そしてある種の魚が陸に上がり、呼吸を始め、手足を持ち、

歩き、立ち上がった。

その残像がいく重にも重なり合いながらついに背後で

結びつく。

目前から背後へ。

海を見つめている後ろ姿を、何者かが見つめている。そしてその背後をも…。

大きな円環の一点に立っているようだ。

ふみ出して海にむかえば円環は完結するのかもしれないと思える。

^{マフタ}

瞼に影がちらついている。そっと目を開けて見る。

目前には大きく広がる青空。

卒倒していたのだ。

岬の鼻には灯台もある、砂浜も広がっている、半鐘も立っている。

とても強い光を放って太陽が輝いている。

倒れ行く瞬間の夢想。

夢の中の闇。

吐き気がする。

そういえば夕べは暑く、寝苦しく、闇に向かって目を見開き、

なにか恐ろしい質問をしてしまった気がする。

夏。

/ アーティスト・プロフィール

天児 牛大 Amagatsu Ushio

山海塾主宰・振付家・演出家・舞踏家



photo by Yuji Arisugawa

1949年神奈川県横須賀市生まれ。75年に山海塾を創設。作品『アマガツ頌』(77)、『金柑少年』(78)、『処理場』(79)を発表後、80年に初めての世界ツアーを行う。81年より、フランスおよびパリ市立劇場を創作の拠点とし、同年アヴィニオン・フェスティバルで『漠紀』を発表。82年以降、およそ2年に1度のペースで、パリ市立劇場との共同プロデュースにより、12作品(※)を発表している。

山海塾以外でも活躍する天児は、88年に米国ジェイコブス・ピロー財団の招待でフィリップ・グラス作曲による『風姿』を発表。89年には、東京のスパイラルホール(東京・青山)の芸術監督に就任し、『アポカリプス』(89)および米国人ダ

ンサーを使った『フィフス-V』(90)の構成・演出・振付をてがける。92年、バニョレ国際振付コンクールの審査委員長を務め、同年、フランス政府から芸術文化功労章(シュバリエ章)を受章。

オペラの演出も手がけ、97年にはペーター・エトヴェシュ指揮によるバルトークのオペラ『青ひげ公の城』を東京国際フォーラムで上演。98年には、同氏の作曲による新作オペラ『三人姉妹』(原作:チェーホフ)をフランス・リヨン国立歌劇場にて演出し(世界初演)、本作品はフランス批評家協会最優秀賞を受賞した。なお、『三人姉妹』は2001年11月にパリのシャトレ座にて、02年3月にブリュッセル(ベルギー)の王立ラ・モネ劇場(テアトル・ロイヤル・デュ・ラ・モネ)、4月にリヨン国立歌劇場、5月に、オーストリアのウィーン・フェストボーヘンにて再演された。また10年ぶりに、ペーター・エトヴェシュ作曲による新作オペラ“Lady SARASHINA”(原作:菅原孝標女「更級日記」)の演出を手がけ、今年(08年)3月にリヨン国立歌劇場にて世界初演。本新作オペラは、再び、フランス批評家協会最優秀賞を受賞。09年2月にオペラ・コミックにて再演される。

<その他の受賞歴>

1995年 外務大臣表彰(山海塾)

2001年 第33回舞踊批評家協会賞(山海塾)

2002年 第26回ローレンス・オリヴィエ賞の「最優秀新作ダンス作品賞」(作品『ひびき』)

2004年 平成15年度芸術選奨文部科学大臣賞[舞踊部門](天児牛大)

2007年 第6回朝日舞台芸術賞グランプリ(作品『とき』)およびキリンダンスサポート(山海塾)

※パリ市立劇場との共同プロデュース作品

『縄文頌』(1982年)、『熱の型』(1984年)、『卵を立てることから一卵熱』(1986年)、『闇に沈む静寂ーしじま』(1988年)、『そっと触れられた表面ーおもて』(1991年)、『常に揺れている場の中でーゆらぎ』(1993年)、『ゆるやかな振動と動揺のうちにーひよめき』(1995年)、『遙か彼方からのーひびき』(1998年)、『かがみの隠喩の彼方へーかげみ』(2000年)、『仮想の庭ーうつり』(2003年)、『時のなかの時ーとき』(2005年)、『降りくるものなかでーとばり』(2008年)

山海塾

1975年に主宰・天児牛大によって設立された舞踏カンパニー。1980年より海外公演を開始し、1982年からは、世界のコンテンポラリーダンスの最高峰であるパリ市立劇場(※1 THEATRE DE LA VILLE, PARIS)を創作活動の本拠地として、およそ2年に1度のペースで新作を発表している。

1982年以降の作品は、すべてパリ市立劇場との共同プロデュース(※2)。日本で生まれたカンパニーでありながら、厳しく作品の質を問う同劇場が、25年以上にも渡り共同プロデュース形式で創作を支援し続けているカンパニーは、世界でもわずかしかな存在しない。

山海塾の作品は、演出・振付のほか、空間や衣裳のデザインも総合的に天児牛大が創作している。天児は一貫して舞踏を「重力との対話」として捉えながら、「誕生」「死」といった普遍的な人間の内的本質に迫る。身体言語に基づく独自のアートフォーム(表現形態)を創りあげたこと、作品の普遍性、そして何よりもその表現の芸術的強度によって、世界各国できわめて高い評価を得てきた。

www.sankajuku.com

世界 43 カ国で支持

山海塾はヨーロッパだけではなく、北米、中南米、オセアニア、アジアなど世界 43 カ国のべ 700 都市以上でワールドツアーを行っている。(2008年1月現在)

ローレンス・オリヴィエ賞受賞

山海塾は、2001年5月にロンドンのサドラーズ・ウェルズ劇場(Sadler's Wells Theatre)(※3)で『遙か彼方からの—ひびき』を上演。そして同作は、02年2月15日、イギリスで最も権威のある舞台芸術賞であるローレンス・オリヴィエ賞(※4)の“最優秀新作ダンス作品賞”(Laurence Olivier Award for Best New Dance Production)を受賞。

第6回朝日舞台芸術賞グランプリ受賞

キリンダンスサポート受賞

2007年1月、山海塾の『時のなかの時—とき』が、年間のベストステージに対して贈られる朝日舞台芸術賞のグランプリを受賞。さらに、受賞対象となったダンス作品の中から選ばれるキリンダンスサポートが、山海塾へ贈られた。

※1 パリ市立劇場(Théâtre de la Ville, Paris)

パリのシャトレ広場に位置し、世界でも有数の質の高いプログラムをもつ劇場として有名。「コンテンポラリーダンスの殿堂」とも呼ばれ、上演される作品は、世界のダンス業界から高い注目が集まる。

※2 共同プロデュース

パリ市立劇場と山海塾との共同プロデュース契約は、将来にわたる長期間の創作活動を保証するものではなく、新作発表の都度、次の共同プロデュース契約の有無が決定される。

※3 サドラーズ・ウェルズ劇場(Sadler's Wells Theatre)

イギリスにおける舞踊の中心的な役割を果たしている劇場。1998年に新装オープンし、現在もなお、国際的でダイナミックなプログラムをロンドンの観客へ紹介し続けている。

※4 ローレンス・オリヴィエ賞

演劇・オペラ・ダンス等で優れた個人・団体へ贈られる、古い歴史を持つイギリスの舞台芸術賞。1976年に前身である The Society of West End Theatre Awards が創設され、84年に現在の名称となった。日本人では、85年に森下洋子氏が個人賞で受賞されている。オリヴィエ賞の作品賞を受賞した日本のカンパニーは山海塾が初。

／ 特別寄稿

「清冽な狂気、またの名を魂の創作衝動」

岩城京子(演劇・舞踊ジャーナリスト)

優れた作家の処女作には「純粋な狂気」ともよべる制御不能な衝動がある。何かを作らねば、何かを表現しなければ、狂ってしまう。いつきの猶予も許さぬ火傷しそうな情動。それが彼／彼女の魂をいやおうなく突き動かす。天児牛大が28歳のときに世に送り出した1978年発表の『金柑少年』にも、こうした創作衝動が間違いなく見てとれる。そしてそれは初演時から四半世紀以上のときを経た今も、色褪せることなく健在。観客は劇場の間に身を置いたその瞬間から、この清冽な湧水のごとき情動に心をさらわれることになる。

厳密に言えば天児は、この作品に先ずること1年前に実質的な処女作『アマガツ頌』を生みおとしている。だが彼はこの作品の出来映えにあまり納得がいかず、そこで未整理に終わった思考の切片に改めてふりかけ、発展的なかたちで本作を創出した。なので山海塾が完全体の創作物として堂々世に送り出した作品としては、この『金柑少年』が初めてのものということになる。初演は東京の日本消防会館ホールにて、たった2日間のみ。ただ「自分のエッセンスが埋めこまれている」と天児自身が言いきる本作は、おのずと口づてに評判を広めてゆき、80年にはついに海外にまで進出。やむにやまれぬ純粋な狂気は、日本を突破し欧州の観客の心にも刺さることになったのだ。

そこでこの稿ではまず、初演当時を振り返り作家の内にはどのような衝動が蠢いていたのか、なぜこのような作品を生み出したいと欲したのか。その原点を明らかにしていこうと思う。『金柑少年』の種火は、どのように燦りはじめたのか。天児本人に問いかけてみた。

「何よりもまず自分のなかにあるとても個人的な疑問符――、これに徹底して集中していくことで作品は形をなしていきました。具体的にいうなら、まず内的な疑問符としては、私が横須賀で過ごした少年時代にふと思った『なぜ人間の生命にはリミットがあるのか』という恐ろしさ。この原初的な記憶に入り込んでいくかたちで、冒頭からの場面は作りあげられていきました。また外的な疑問符としては『いったいコレオグラフとは何なのか?』という素朴な問いかけ。ただニコニコ笑いながら正面に向かって歩くことや、格闘技のように人間が絡みあうことも、舞踊と言っていないのではないかと。つまり踊らない身体で、どれだけ時間と空間に耐えることができるのか……、という身体の限界にここでは挑戦したかったのです。だからこそ冒頭で、あんなむちゃなことを披露しているんですよ」

夏の夜、宙を仰ぐ少年。彼は盛夏にたちあられる不穏な蟹気楼のようにゆらゆら身を揺らしたかと思うと、突如、真後ろにバンッと”跋倒”する。天児が「むちゃなこと」と称するのは、この幕開けの振り付けのこと。ただ人間が真後ろに倒れる。それだけのことをコレオグラフと呼んでもいいのではないかと。そんな若き天児青年の直球の疑問が、この振りひとつに集約されている。

ちなみに当時はちょうど、ピナ・バウシュのタンツテアターが世に出始めたころ。世界的な潮流としても「いったい踊る身体とは何なのか」という疑問符が漂いはじめていたころで、完全に個人的な疑問から生じた作品でありながら、天児は期せずしてこの時代の潮流に乗ることになったのだ。豪奢な孔雀を抱きかかえ鳥の鼓動に呼応してしとやかに歩む青年、二頭身のいびつな豆太郎から雅やかなドレス姿にメタモルフォーズして狂乱的に跳ねる嘆きの聖母、そして水平線の先で逆さ吊りとなり無限の眠りをむさぼる

痛ましくも穏やかな生贄。従来のモダンダンスの概念からは想像だにできない異質な身体が、ここでは次々に提示される。

また内的な疑問符に関しては、天児が前述した「生命のリミット」ということだけにとどまらず、様々な熱量の高い感情が舞台から表出されてくる。この世に生まれた歓びと哀しみ、他者とむつまじくあう温もりと孤独、すっぱだかの身体の猥雑さと静穏さ。なぜかここでは、いっけん相反するとも思える感情がつねに隣り合わせで描かれる。それは少年期と壮年期の迫間で揺れる、若者特有の理屈づけのできぬカオティックな心情をあらわすようでもあるし、また、いまだ何者でもなかった天児青年個人のたゆたう心を象徴しているようにも思える。

「当時、私は小さなアパートのふすまに無数の創作メモを貼りつけていたんです。そして年単位の時間をかけて、そのメモをじっくり眺め、自分のなかで不要だと思える言葉を一枚一枚はがしていった。最終的にそこではがれ落ちることなく残った言葉。それが結果的に、作品の核となり創作につながっていきました。だからこの作品では何よりも、その紙片に端を発する内的な設定を持続させていくことが大切。その場面場面でどのような感情をホールドできるか、そしてその感情が次にどのように転化していくか。正直、そうした内的な変化を追いかけていく緊張感さえ途絶えさせなければ、またまわりの光や音の変化にきちんと対応していけば、おのずと動きはあとから付随してくると思ったのです」

動きはあとから付随してくる——、この言葉に説得力をもたらす、あるエピソードがある。ご存知のように本作では生きた孔雀が、作品中、登場するのだが、初演時は孔雀とリハーサルをする十全な予算がとれず、ほぼぶっつけ本番で当日を迎えることになった。「とにかく孔雀のエネルギーをホールドするぞ」。細かい振りはまったく取り決めず、その設定と大枠の流れだけを持続させることに全精力をかたむけた。そして「まるでチャンスオペレーションのように」細部の動きはあとから舞台上での孔雀とのやりとりで決められていったという。

このように本作は天児個人の非常にインティメットな疑問符から生じた表出物なだけに、振付家はおのずと、4つのソロパートをすべて自身で担い踊ってきた。合計で 55 分。身体を酷使しつづける独走だ。78 年から踊り始め、さすがに 15 年が経つころには「体力的な限界」を感じずようになっていた。

「なるべく初演時から 15 年、原型を変えないことを念頭におき上演しつづけてきたんです。あまり変えることを引き受けてしまうと、作品の質感があるとき違うことになってしまうから。そうならないよう、とにかくさきほど述べた内的な追いかけに集中して、毎回でいいいに踊っていた。けれど 40 歳を過ぎたあたりで、やはりどうしても体力的に原型を保持するのがムリだということになった。というのもこれは初演時に2日のみ上演するつもりで作った作品なので、体力配分がどうのこうの、ということが全く配慮されていないんです。だから 93 年に、もうこれ以上踊り続けられないという結論に至り、いちど上演を封印することにした」

しかしこの封印後も、本作の上演を願う声が途絶えることはなかった。

「どうしてもまたキンカンが見たい」

そんな声が世界中で弱まることはなかった。そこで天児は、ひとつの賭けに出る。自分が踊ることが不可能なら、他人の身体に振りを移すことで作品を蘇生させてみよう。そして 2005 年に彼は本作のリクレーションに踏み切ったのだ。

繰り返しになるが、本作はあまりに天児個人の原初的な皮膚感覚に負うところが大きい作品なだけに、

リクリエーション作業が開始される前は、果たして他の人間が作者の内的な情景を引き受けることができるのか、という危惧も周囲には少なからずあった。だが天児は見事にこの疑念に打ち勝ち、作者個人の肉体から離れながらも、核に宿る凶暴なまでの身体性やカオティックな焦燥感は失わぬ、よりいっそう普遍的な美を保つ作品を完成させた。これにより天児は、本作が、ある特異な個人の身体から離別したところでも生きながらえる強度を持つ真のマスターピースであることを証明。むしろ闇夜に向かいひとり言葉を吐き出してしまうような、青年期特有の危うく純粋な精神と身体さえあれば、本作は半永久的に生き続けることができるのではないか……、という考えをも観客の脳裏に植えつけた。

無論、これは天児本人が踊る『金柑少年』と完全に同じものではない。戦後直後の煤けた横須賀の匂いや、頭上に降る太陽の残酷なざらつき、水平線を眺め命の終焉について静思した作者個人の皮膚感覚を、そっくりそのまま今の若者たちに移植することはできない。だがより普遍的で根源的な、若者特有の内的変容はきちんとそこに埋めこまれているし、作品のダイナミズムも失われていない。これは、作品が初演から30年もの時を経たことを考えれば驚嘆に値することだ。

28歳の天児青年が純粋な狂気をもって生み出した処女作は、今も、別個の身体を借りて濁りなく清らかに息づいている。

Kyoko Iwaki / 1977年、東京都生まれ。86年から91年までニューヨーク在住。94年から96年まで東京バレエ団選科に在籍。慶応義塾大学環境情報学部卒。在学中より舞台コラム、取材文等を書き始める。編集部勤務後、2001年に独立。現在主に演劇・ダンス・トラベルを専門にしたジャーナリスト、エッセイストとして活動。国内外で取材をこなし年間200本以上の記事を執筆する。主な執筆先に『AERA』『Marie Claire』『NUMERO』など。 <http://kyokoiwaki.com>

/ クレジット

演出・振付・デザイン

天児牛大

音楽制作

吉川洋一郎

舞踏手

竹内晶

市原昭仁

長谷川一郎

松岡大

浅井信好

土肥圭史

初演

1978年6月 日本消防会館ホール

リ・クリエーション

2005年12月 パリ市立劇場

主催

フェスティバル/トーキョー

公演、チケット情報

会場	東京芸術劇場中ホール
チケット料金	全席指定 一般 S席 4,500円、A席 3,500円、 学生 3,000円(要学生証提示) / 高校生以下 1,000円
お取扱い	フェスティバル/トーキョー(HPのみ) ぷれいす(電話のみ) 電子チケットぴあ(Pコード: 391-403)、イープラス 東京芸術劇場チケットサービス 03-5985-1707

公演スケジュール

3/7 sat	3/8 sun
19:00	13:00/18:00

F/Tパフォーマンス チケット 2008年12月18日(木)前売開始 ※F/T参加作品は対象外

■チケット取扱

フェスティバル/トーキョー(HPのみ) <http://festival-tokyo.jp>

ぷれいす(電話のみ) 03-5468-8113(平日 11:00-18:00)

電子チケットぴあ 0570-02-9999(Pコード予約) <http://pia.jp/t> ※『サンシャイン63』と『演劇/大学09春』は対象外

イープラス <http://eplus.jp> ※『サンシャイン63』と『演劇/大学09春』は対象外

- ・指定席の場合、開演時間に遅れたお客様はご指定のお席にお座りになれない場合がございます。
- ・未就学児童のご入場はお断りさせていただきます。
- ・受付開始及び当日券の販売は開演1時間前、開場は30分前からとなります。
- ・チケットの払戻、観劇日の変更はできません。
- ・チケット料金には消費税が含まれます。

F/Tパフォーマンスを、選んで観る。全部観る。誘って観る。学生も観る。

フェスティバル/トーキョーならではのお得なチケットでお楽しみください。 ※フェスティバル/トーキョー・ぷれいすのみ取扱い

◇F/T回数券 選んで観る! ※お好きな演目を選んでご覧いただけます。(『サンシャイン63』は対象外)

3演目 ¥10,000(¥3,333/枚)、5演目 ¥15,000(¥3,000/枚)

◇F/Tパス(13演目)全部観る! ※全ての演目をご覧になれます。(『サンシャイン63』は対象外)

¥30,000(¥2,300/枚)

※F/T回数券、F/Tパス(13演目)のお取扱いについて

- ・2月13日(金)18:00まで販売(限定枚数)
- ・観劇演目・日時が未定でも購入できます。
- ・購入後は演目・日時のご予約を受付けます。
- ・予約なしでも当日ご入場出来ます。但し、満席時はご入場頂けない場合がございます。
- ・確実にご覧頂くためには演目・日時予約をお勧めいたします。
- ・回数券・パスはご本人様のみ有効です。

◇ペアチケット 誘って観る!

チケット2枚分の料金から10%OFFでご購入頂けます。(例/¥4,500×2枚=¥9,000→¥8,100)

※2名同日観劇のみお受けいたします。 ※当日券のご用意はございません。 ※『演劇/大学09春』は対象外です。

◇学生料金 学生も観る!

学生 全演目 ¥3,000(要学生証提示) 高校生以下 全演目¥1,000

※東京芸術劇場中ホール公演はS席 ※当日でもご購入できます。

◇Port Bセット券(『雲。家。』『サンシャイン63』) ¥6,400(¥3,200/枚)

※ぷれいすのみ取扱い ※2月13日(金)18:00まで販売(限定枚数)

3演目	¥10,000(¥3,333/枚)	F/Tパス	¥30,000(¥2,300/枚)
5演目	¥15,000(¥3,000/枚)	ペアチケット	10% OFF

/ フェスティバル/トーキョー09 春 開催概要

名称	フェスティバル/トーキョー09 春 Festival/Tokyo 09 spring
会期・会場	2009年2月26日(木)～3月29日(日) 東京芸術劇場 中ホール 小ホール1・2 あうるすぽっと(豊島区立舞台芸術交流センター) にしすがも創造舎
プログラム	F/T パフォーマンス 14 演目 F/T 参加作品 5 演目 F/T プロジェクト(シンポジウム/ステーション/クルー)
主催	東京都 財団法人東京都歴史文化財団 フェスティバル/トーキョー実行委員会 豊島区、財団法人としま未来文化財団、NPO 法人アートネットワーク・ジャパン
共催	社団法人国際演劇協会(ITI/UNESCO)日本センター
事業共催	国際交流基金
協賛	アサヒビール株式会社、株式会社資生堂
助成	財団法人アサヒビール芸術文化財団
後援	外務省、社団法人日本芸能実演家団体協議会、社団法人日本劇団協議会
協力	東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、 豊島区観光協会、社団法人豊島産業協会、社団法人豊島法人会
宣伝協力	株式会社ポスターハリス・カンパニー
平成20年度文化庁国際芸術交流支援事業	
提携事業	東京芸術見本市2009

/ 写真/クレジット一覧

『金柑少年』



©Sankai Juku



©Sankai Juku



©Sankai Juku



©Sankai Juku



©Hitomi Sato

ポートレート: 天児牛大



©Yuji Arisugawa



©Kazumi Kurigami